

マリラ語における動詞不定形の基本構造

角 谷 征 昭

0. はじめに¹

本稿は、マリラ語²の動詞の不定形³に関して、調査結果をまとめることを目的としている。マリラ語の動詞研究の導入として、まず、動詞の基本構造を把握する必要がある。具体的には、不定形の形態統語構造、語根の音節構造、対格接辞、拡張辞⁴（拡大辞と派生辞）、声調を扱っている。

1. 不定形の構造

不定形の基本構造は、「ku-語根-終末母音」で、語頭に/ku-/が添えられている。この/ku-/は、名詞クラス中の15クラスの接頭辞であり、動詞不定形自体が一種の名詞であると言える。不定詞に添えることのできる形態素は、対格接辞、拡張辞（拡大辞と派生辞）と終末母音で、それらの形態の配置は次のようになる。

ku - (対格接辞) - 語根 - (拡大辞) - (派生辞) - 終末母音
(拡張辞)

/ku-/は15クラスの接頭辞である。このクラスに含まれるのは、動詞の不定形だけである。また、15クラスは、オーグメント⁶が付かない。

対格接辞は、動詞がとる目的語とクラス又は人称の一致を見せる。

拡張辞は、動詞語根に後接して何らかの意味を添えるものであるが、本稿では、文法機能を大きく制御する5種類を派生辞とし、その他を全て拡大辞と呼ぶ。拡大辞は、語幹に含まれる形態で、意味が明確に理解できるものと、意味を失い、語根と共に語幹を形成して初めて意味を持つものがある。拡大辞によっては、語幹との分離が困難なものもあり、語幹の一部として解釈するほうがよい事が多い。ここでは、語幹からそれらの拡大辞を除いたものを語根と呼んでいる。拡大辞の表す意味には、自・他動性、使役性のような文法的機能を有するものと、文法的な影響を持たず、行為者の態度や行為の完成度を表すもの、などがある。

派生辞には、適用(Applicative, Ap.), 使役(Causative, Cs.), 相互(Reciprocal, Rp.), 可能(Potential, Pot.), 受身(Passive, Ps.)がある。

動詞は、必ず終末母音(Final Vowel)が必要である。不定形の終末母音は、基本的に/-a/だが、借用語⁷では、それ以外のものも見られる。

2. 語根の音節構造

マリラ語の音節構造は、V (母音), S (半母音), N (子音前鼻音), C (子音) を用いて表すと、V, N⁸, (N)C(S)Vとなる。動詞語根の音節構造は、次の様に表わされる⁹。

CVC型

- CSVNC /-myant-/「舐める」, /-zyung-ul-/「取り囲む」
 CSVC /-swig-/「悲しむ」, /-byal-/「植える」, /-pyot-/「折る」, /-zyul-/「脱ぐ」
 CVNC /-ping-/「反対する」, /-pemb-/「焼く」, /-bomb-/「する」, /-sumb-/「射る」
 CVC /-hom-/「叩く」, /-teg-/「捕まえる」, /-pat-/「得る, 嫌う」
 CSV:C /-sya:l-/「残る」, /-twa:l-/「届ける」
 CV:C /-pa:p-/「産む」, /-te:g-/「迷う」, /-pa:t-/「剥く」, /-tu:y-/「恐れる」

VC型

- VNC /-anz-/「探す」, /-imb-/「歌う」
 VC /-ib-/「盗む」, /-eg-/「運ぶ」

VCV型

- VCV /-ozi-/「きれいにする」, /-isi-/「降ろす」

CV型

- CV /-gu-/「落ちる」, /-pe-/「与える」, /-pi-/「焼かれる」

動詞は、語根が基底形で子音始まりか、子音終わりかで、CVC型、VC型、VCV型、CV型の4種類に分類することができる。ただし、語根末の半母音は、母音として解釈している。CVC型とVC型は子音始まりかどうかの違いがあるが、語根末は共に子音終わりである。動詞が語幹だけで現れることはなく、直後に派生辞、終末母音などが来る。そして、子音終わりの語根は、直後に来る母音¹⁰と音節を形成する。

VCV型の語根は、VとCVに分節でき、CVは、直後に来る母音と音節を形成する。

CV型は、語根が母音終わりであることが特徴で、直後に終末母音が付くと、語根末が[e]の時は消え、[u]か[i]の時は、半母音化して、それぞれ[w][j]になる。その結果、派生辞の付かない実現形において、語根に母音がなくなるのがCV型の特徴である。CV型(母音終わり)の動詞は、kúfa「喜ぶ, 夜が明ける, 日を過ごす」, kúpa「与える」, kúgwa「落ちる」, kúfwa「死ぬ」, kúlwa「戦う」, kúsyá「挽く」, kúpya「焼かれる」などである。

3. 対格接辞

対格接辞は、次の表に示すように、動詞のとる目的語の人称・名詞クラスと一致するものが選択される。3人称は1・2クラスに含まれるので、人称の表には含めていない。再帰の

対格接辞には、人称、クラスの区別がなく、/i-/だけである。

表 1 人称、再帰、名詞クラスの対格接辞

人称と数	接辞	クラス	接辞	クラス	接辞	クラス	接辞
1人称単数	-n-	1	-mu-	8	-vi-	14	-wu-
1人称複数	-ku-	2	-ba-	9	-i-	15	
2人称単数	-tu-	3	-gu-	10	-zi-	16	-pa-
2人称複数	-ba-	4	-i-	11	-lu-	17	-ku-
		5	-li-	12	-ha-	18	-pa-
		7	-ji-	13	-tu-	再帰	-i-

1人称単数/-n-/と、3人称単数/-mu-/は、直後に来る音によって表2のような音韻変化を見せる。

表 2 1人称単数/-n-/と1クラス(3人称単数) /-mu-/

		1人称単数	1クラス(3人称単数)
/-gu-isi-/	「落とす」	kũṅgwisyá	kúmugwisyá
/-lol-/	「見る」	kũndóla	kũnnóla
/-bomb-el-/	「使う」	kũmbombéla	kúmubombéla, kũmmombéla, kúmombéla
/-eg-/	「運ぶ」	kũněga	kũmwěga
/-ya:t-il-/	「訪れる」	kũnja:tíla	kũmuya:tíla, kũja:tíla

4. 派生形

派生形は、適用/-il-/、/-el-/、使役/-izi-/、/-ezi-/、相互/-an-/、可能/-ih-/、/-eh-/、受身/-w-/の派生辞を付けて作られる。派生辞が[i]と[e]のどちらで始まるかは、直前の音節との母音調和によって決まる。直前の母音が [i][a][u]のとき[i]になり、[e][o]のとき[e]になる。

派生辞は、目的語をとる派生辞(適用、使役)と、目的語をとらない派生辞(相互、可能、受身)に大別することができ、相互、可能、受身の派生辞どうしは共起しない。

4. 1. 適用形 /-il-/、/-el-/

適用形は、受益者「～のために」、道具「～を使って」、場所「～に」などを対格に昇格させる。対格接辞で標示される語がその動詞の「第一の目的語」と考えられ、受動文の主語になることが出来る。

また、適用形は、間接的な行為を表すことがある。

(1) kúbaséha 「彼らのことを笑う」(彼らを目の前にして彼らのことを笑う)

(2)kúbaseǰéla 「彼らのことを笑う」(彼らのいるいないに関わらず、彼らのことを笑う)

4. 2. 相互形 /-an-/

相互形は、複数の動作主が行為をやり合う意味が主だが、複数の動作主が行為を交互に繰り返す意味もある。前者は、作用が相互に向かっている動作(例:叩き合う)で、後者は作用が相互に向かっていない動作(例:吐きまくる)についてである。

(3)kúhoma 「叩く」 kuhómana 「叩き合う」
(4)kutápiha 「吐く」 kutapíhana 「複数人が吐きまくる」

4. 3. 可能形 /-ih-/, /-eh-/

可能形は、行為の対象が行為の結果を被る可能性のある状態にあるという意味が主だが、行為の対象が行為の結果を被る可能性を増大する性質を持っていることも意味する。前者は、kulíliha 「(果実が熟して)食べられる」、kupatihana 「(石鹸が)入手可能だ」、kulóleha 「(遠くに山が)見える」などで、後者は kuhopéleha 「(人が)騙されやすい」、kubazúliha 「(ガラスが)割れやすい」、kufwiha 「(動物が病気で)死にやすい」などである。

5. 拡大辞

動詞語幹が2音節以上からなるとき、後ろの音節は拡大辞である可能性がある。様々な拡大辞¹¹があるが、自・他動を示す拡大辞をとりあげる。

例えば、kudébuha 「裂ける」という語の語幹/-debuh-/は、/-deb-uh-/のように分節することができ、/-uh-/を/-ul-/に交換すると kudébula /-debul-/ 「裂く」となり、/-uh-/と/-ul-/は、自・他動の組になっている事がわかる。しかし、*kúdeba /-deb-/では意味をなさず、前述したどちらかの拡大辞を必要とする¹²。自・他動を表す拡大辞にはいくつか見られるが、拡大辞と派生辞は起源が同じと考えられ、形態的に同一のものが見られる。自・他動を示す拡大辞の組み合わせは、決まっており、どの動詞語根にでも付くわけではない。

表3 自・他動性を示す拡大辞

自動	他動
	-w-
	-isi-, -esi-
-uh-	-ul-
	-usi-
	-uzi-
-oh-	-osi-
-an-	-an-

/-w-/の例は、以下の通りであるが、自動詞に拡大辞が付いていないので、これらの動詞語根自体が自動性を持つと考えられる。

(5)/-fum-/	kúfuma 「出る」	kufúmwa 「出す」
(6)/-zub-/	kúzuba 「上がる」	kuzúbwa 「上げる」
(7)/-zim-/	kúzima 「消える」	kuzímwa 「消す」
(8)/-mem-/	kúmema 「満ちる」	kumémwa 「満たす」
(9)/-yegemb-/	kuyegêmba 「緩む」	kuyegěmbwa 「緩める」
(10)/-sa:m-/	kusâ:ma 「移る, 移動する」	kusâ:mwa 「移す, 移動させる」

次の例に用いられている/-isi-/、/-esi-/は、使役と共通の形態であり、母音調和も起こすが、「使役」ではなく、「他動性」を示している。これらの動詞も、自動詞に拡大辞が付いていないので、動詞語幹自体が自動の意味を持つと考えられる。

(11)/-gu-/	kúgwa 「落ちる」	kugwísya 「落とす」
(12)/-om-/	kwôma 「乾く」	kwomésya 「乾かす」

以下は、自動に/-uh-/、他動に/-ul-/の拡大辞が付く動詞である。自・他動詞共に拡大辞を必要とするので、これらの語根は、自・他動どちらの意味も持っていないと言える。

(13)/-mens-/	kuménsuha 「割れる」	kuménsula 「割る」
(14)/-baz-/	kubázuha 「潰れる」	kubázula 「潰す」
(15)/-zungul-/	kuzungúluha 「巻かれた物が解ける」	kuzungúlula 「巻かれた物を解く」
(16)/-seg-/	kuséguha 「移動する」	kusegúsya 「移動させる・退ける」
(17)/-gal-/	kugáluha 「戻る」	kugalúsya 「戻す」
(18)/-pung-/	kupũguha 「減る」	kupungúzya 「減らす」
(19)/-gol-/	kugólóha 「真直ぐ伸びる」	kugolósya 「真直ぐ伸ばす」

表3を見ると、母音調和¹³により、自動詞が/-uh-/のものと/-oh-/のものに分かれる。/-oh-/のものは語根の母音が[o]のものである。拡大辞には、意味が不明の例が多く見られるが、それらを見ても、/-ol-/は、やはり、直前の語根の母音が/o/のときに用いられる。

(20)/-sog-ol-/	kusógola 「出発する, 出かける」
(21)/-pot-ol-/	kupótola 「塗る」
(22)/-yong-ol-el-/	kuyongólela 「溶ける」

語によっては、*/-usi-/*と*/-ul-/*が付いて、意味を分担することがある。次の例においては、*/-usi-/*が他動を表し、*/-ul-/*がその他の意味を表している¹⁴。

- (23)*/-dam-/* kudámuha 「起きる」
 **kúdama* kudamúsyá 「起す」
 kudámula 「目を閉じずにいる」

次の例は、*/-h-/*と*/-si-/*の対立があるものの、語根と派生辞の融合したものである。

- (24)*/-ih-/* kwíha 「降りる」 */-ih-si-/* kwísya 「降ろす」
 (25)*/-ah-/* kwáha 「燃える」 */-ah-si-/* kwásya 「燃やす」
 (26)*/-nu:h-/* kunú:ha 「臭う」 */-nu:h-si-/**kunúnsya*¹⁵ 「臭いを放つ」

*/-an-/*と*/-aŋ-/*¹⁶の組も多くないが見られる。*/-aŋ-/*は、*/-ani-/*の異形態¹⁷であり、*/-aŋ-/*で現れるとき、語末から2モーラ目にHを持つ。

- (27)*/-gond-/* kugondâ:na 「曲がる」 kugondǎ:ŋa 「曲げる」
 (28)*/-bung-/* kubungâ:na 「集まる」 kubungǎ:ŋa 「集める」
 (29)*/-hol-/* kuhólana 「似る」 kuholáŋa 「似せる、比べる」

6. 声調

6. 1. マリラ語の声調の概要

マリラ語の声調は、モーラと音節に関係しているので、モーラと音節について簡潔に解説する。マリラ語のモーラについて、Vは1モーラを担い、CSVは2モーラを担う。NCV音節において、Nは1モーラを担うが、N自体はモーラを手放し、直前の音節が2モーラになる¹⁸。

マリラ語の声調は、基底¹⁹でHとLがあり、モーラを単位にしている。実現形ではH（高声調）、L（低声調）、F（下降声調）、R²⁰（上昇声調）がある。FとRは、それぞれ基底でHLとLHであり、実現のためには、2モーラの音節が必要となる。2モーラの音節が現れる環境は語末からの距離によって制限される。具体的には、語末から4モーラ目と3モーラ目にある2モーラの音節が限界で、それ以上前では、音節が基底で2モーラであっても、実現形は1モーラになり、その音節にHLまたはLHが存在するとき、どちらもHとして実現²¹する。5モーラの連続を想定し、モーラの語末からの順目を番号で示す。囲みは1音節2モーラであることを示す。

モーラ 5 4 3 2 1

基底形 (L H) L L L
 実現形 H L L L

基底形 (H L) L L L
 実現形 H L L L

6. 2. 動詞不定形の声調

不定形の声調は、対格接辞の有無によって異なる。対格接辞のないときは、基本的に語末から3モーラ目にHが置かれ(表4)、対格接辞のあるときは、対格接辞の直前と語末から2モーラ目の2箇所がHになる(表5)。不定詞が2モーラの動詞は、語幹がCVのものであるが、単純形では語幹がCだけになる。しかし、基底ではやはり、CVであり、派生形にすると、その他の動詞と同じになる。kúpaについても、基底では、*/ku-pe-a/であり、Hは語末から3モーラ目についていることになる。他のCV型も同様に解釈できる。

語末から4・3モーラまたは3・2モーラの音節にLHがある時、RまたはHHで実現する時がある。

モーラ 5 4 3 2 1
 基底形 L (L H) L L
 実現形 L H H L L
 L H
 基底形 L L (L H) L
 実現形 L L H H L
 L H

- (30)kubõmbela [kubõmbela]~[kubómbela] 「する(適用形), 使う」
 (31)kupã:pwa [kupã:pwa]~[kupá:pwa] 「生まれる」
 (32)kúzipã:ta [kúzipã:ta]~[kúzipá:ta] 「それら(cl.10)を剥く」

表4を見ると、動詞語幹の音節構造に関わらず、全ての活用形で後ろから3モーラ目がHになっている。相互形と受身形については、適用形との複合形になることが多く、表4にもその形が多く見られる。

表4 対格接辞の付かない不定形の派生²²

単純形	適用形	使役形	相互形	可能形	受身形
kumyãnta /-myant-/	kumyãntila	kumyantízya	kumyantílana	kumyãntiha	kumyantílwa
kuswíga /-swig-/	kuswíjila	kuswijízya	kuswígana	kuswíjiha	kuswígwa
kubõmba /-bomb-/	kubõmbela	kubombézya	kubõmbana	kubõmbeha	kubõmbwa
kútega /-teg-/	kutéjela	kutejézya	kutégana	kutéjeha	kutégwa

kutê:ga /-te:g-/	kutěj:ela	kute:jézya	kutěj:gana	kutěj:jeha	kutěj:gwa
kwânza /-anz-/	kwănzila	kwanzízya	kwanzílwa	kwănzana	kwanzílwa
kwîba /-ib-/	kwîbila	kwibízya	kwibílana	kwîbiha	kwibílwa
kúgwa /-gu-/	kugúila	kugwísya	kugwílana	kugwíha	kugwílwa
kúpa /-pe-/	kupê:la	kupe:lézya	kupê:lana	kupê:leha	kupê:lwa

表5は、対格接辞の付くときの不定形の声調パターンを示している。全ての語彙が同じパターンになっていることがわかる。表中では、10クラスの対格接辞/-zi-/を用いている。

表5 対格接辞の付く不定形の派生

単純形	単純形	適用形	使役形
kumyânta /-myant-/	kúzimyânta	kúzimyantíla	kúzimyantizyá
kuswîga /-swig-/	kúziswîga	kúziswijíla	kúziswizyá
kubômba /-bomb-/	kúzibômba	kúzibombéla	kúzibombezyá
kútega /-teg-/	kúzitéga	kúzitejéla	kúzitejezyá
kutê:ga /-te:g-/		kúzitejílwa	kúzite:lezyá
kwânza /-anz-/	kúzyânza	kúzyanzíla	kúzyanzizyá
kwîba /-ib-/	kúzyî:ba	kúzi:bíla	kúzi:bizyá
kúgwa /-gu-/		kúzigufla	kúzigwiszyá
kúpa /-pe-/	kúzipá	kúzipê:la	kúzi:pe:lezyá

マリラ語の語末の音節は、原則として²³、2モーラで実現できず、実現形で1モーラになる。よって、対格接辞が付くなどして2モーラの語末音節にHL又はLHが乗るとき、実現形は語末のHという形で現れる。

モーラ	5	4	3	2	1
基底形	<u>L</u>	<u>L</u>	<u>L</u>	(<u>H</u>	<u>L</u>)
実現形	L	L	L	H	

7. まとめ

本稿の目的はマリラ語の動詞の特質を、調査に基いてまとめることにあった。本稿で扱った不定形は、安定性はあるものの、動詞の変化形の中では、特別な環境である。今後は、テンス・アスペクトを含めた動詞研究を進めていかなければならない。本稿で述べたことは約して以下の通りである。

- ・動詞不定形の構造は、「ku-(対格接辞)-語根-(拡大辞)-(派生辞)-終末母音」となるが、必須の要素は「ku-語根-終末母音」である。
- ・本稿で触れた拡大辞は、他動性の意味の欠如している語根につくものである。固有の意味

を失い、完全に語幹（或いは語根）の一部になってしまったものもある。自・他動の意味を持つ拡大辞は、派生辞と同一又は類似した形態が多く、そのことが、それらの拡大辞の独立性を維持する要因になっているかもしれない。

・動詞語根は、その音節構造からCVC型、VC型、VCV型、CV型の4種類に分けられるが、声調に関して対立はなく、原則として、対格接辞の付かないとき、基底で語末から3モーラ目がHになり、対格接辞の付くとき、語幹の直前と、語末から2モーラ目がHになる。

注

¹ この研究は、文部省科学研究費補助金特定領域研究(A)「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」内の、B02班「危機言語の記述とその動態論的研究—特に共通語との関係で」(研究代表者：東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所教授 梶 茂樹)から、補助を受け行なわれたものである。

² マリラ語(Kimalila)は、タンザニア共和国南西部ンベヤ(Mbeya)県の山岳地帯で話されるバンツー語(Bantu)の一つで、話者は5万～6万人と推定される。マリラ語の話される地域はウマリラ(Umalila)、ウマリラ出身者がマリラ人(Wamalila、単数：Mmalila)であり、彼らの話す言語がマリラ語(Kimalila)である。調査地は、ウマリラのサンティリア村(Santilya)で、40歳代男性(最終学歴サンティリア小学校、職業：専業農家)のマリラ人にインフォーマントとして協力していただいた。

³ 不定形には、/ku-/を使うもの、/i-/を使うもの、接頭辞を付けられないものの3種類が見られる。

本稿で扱うのは/ku-/不定形である。例) kubômba, ibômba, bômba「する」

⁴ 本稿では、動詞語幹に後接する要素を拡大辞と派生辞に分けているが、その区分は、適用形、使役形、相互形、可能形、受身形を作る接辞を派生辞とし、それ以外を拡大辞としている。

⁵ 本稿でのマリラ語の表記は以下の通りである。

/i/[i],/e/[e],/a/[a],/o/[o],/u/[u],/i:/[i:],/e:/[e:],/a:/[a:],/o:/[o:],/u:/[u:]

/b/[β],/ch/[tʃ],/d/[d],/f/[f],/g/[g],/gh/[ɣ],/h/[h],/j/[dʒ],/k/[k],/kh/[x],/l/[l],/m/[m],/n/[n],/ŋ/[ŋ],/ɲ/[ɲ],/p/[p],/t/[t],/s/[s],/ʃ/[ʃ],/v/[v],/w/[w],/y/[j],/z/[z]

⁶ オーグメント(冒頭母音, Augment)とは、名詞、形容詞、属詞(「～の」などの意味を持つ前置詞)において、クラス接辞の前につく母音のことである。基本的に名詞にはオーグメントが付き、オーグメントが付かないと、繫辞文となる。例えば, ifitâ:bu(7)「本」の場合、「これは何ですか?」という質問に対し, fitâ:bu「本です。」という答えになる。

⁷ 借用語は、殆どの場合、スワヒリ語から入ってきており、アラビア語、英語起源の借用語もスワヒリ語を経由している。マリラ語本来の動詞は、僅かな例外を除いて/-a/で終わるので、不定形が/-a/で終わらない動詞は、基本的に借用語と言える。

⁸ 単独で音節を形成する音節主音的鼻音/N/は、NC SV音節の子音前鼻音/N/とは区別される。音節主音的鼻音は、本来/mu/であると解釈される。

⁹ 一覧では、母音の後にC又はNCの後続するものだけを挙げたが、CS又はNC Sの後続するものも見られる。しかし、語幹末のSは拡大辞とも解釈できるので、現時点では一覧から外している。

¹⁰ 多くの場合、語幹末の子音と後続の母音でCV音節を形成するが、受動の派生辞は、/-w/である。よって、受動の派生辞が付くときは、CS V音節を形成することになる。

- ¹¹意味の明確な拡大辞として、「反復、継続」の/-ang-/が挙げられる。kukwè:sa「引っ張る」>kukwesânga「引きずる」、kútema「切る」>kutemânga「(肉、木を)切る」などに見られる。意味の不明な拡大辞には/-am-/がある。kwángama「浮く」、kugúnzama「傾く、俯く」
- ¹²自・他動に関して、動詞語根を3種類に分けられる。1)自動性を有するもの、2)他動を有するもの、3)自・他動のどちらも有しないものである。3)に属する動詞が自・他動の拡大辞を要求すると考えられる。また、1)に属する動詞が他動の拡大辞を要求することがあっても、2)に属する動詞が自動の拡大辞を要求することは観察されていない。
- ¹³マリラ語の母音調和には、派生辞に見られる前舌母音[i][e]に関するものと、拡大辞に見られる後舌母音[u][o]に関するものの2種類が見られる。
- ¹⁴ /-dam-/のように、/-usi-/と/-ul-/の両方出現する例が他にないので、詳細はわからないが、他動に/-usi-/が用いられ、自動に/-uh-/ (自発的行動)と/-il-/ (意図的行動)が用いられると考えられる。
- ¹⁵ /kunũnsya/は、*kunũ:sya? kunũnsya という変化が想定される。マリラ語において、同様に長母音の後ろのモーラが/n/になる語が見られる。例えば、kusê:ha「悪口を言う」の使役形に2クラスの対格接辞を付けると、kúbasenʒezyáとなる。この変化の動機は不明確だが、マリラ語では、子音連続としてNCだけが許されており、また、VVCがVNCとなっても、モーラ数は維持されている。
- ¹⁶例では、長母音になっているものがあるが、これが何によるものか現時点では分からない。
- ¹⁷この形態は、kubungǎ:ɲa「集める」の適用形はkubungǎ:nilaとなり、[ani]で現れている。
- ¹⁸ただし、1音節で3モーラ以上になる環境では、2モーラで実現する。
- ¹⁹基底の声調には、H、Lのように下線を引いている。
- ²⁰R(LH)は、直前のモーラがHのとき、HHになる傾向がある。
- ²¹Hの実現は、Hの有標性と関係がある。つまり、モーラの短縮によって、F、Rの実現が不可能になっても、F、Rの持つHの有標性は維持され、Hとして実現したと考えられる。
- ²²表4、5中の斜線は、理論的にないものと、その語形が、実際に使われ難いことを示すが、今後、埋められる可能性がある。
- ²³殆どの場合、語末のHLはHとして実現するが、kugwísya「落とす」に対格接辞が付くとき、kúzigwisyá (語末がH)だけでなく、kúzigwisyâ (語末がF)も聞かれる。数語について、同様の現象を確認している。隣接言語のニハ語では、語末でFが現れることから、マリラ語も過去にはFで実現していたと思われる。

参考文献

- Busse, Joseph. 1960. *Die Sprache der Nyiha in Ostafrika*, Berlin: Akademie-Verlag.
- Guthrie, M. 1967. *The Classification of the Bantu Languages*. International African Institute, London.
- Voorhoeve, J. 1973. Safwa as a Restricted Tone System. *Studies in African Linguistics*, Vol.4, 1-21.
- Yukawa Yasutoshi. 1992. Tonological Study of Nyiha Verbs, *Studies in Tanzanian Languages*. ILCAA
- 角谷 征昭 2001. 「マリラ語における名詞の声調に関する研究」, 『ニダバ』30号, 53-64, 西
日本言語学会
- 清水 紀佳 1988. 「アフリカの諸言語」『言語学大辞典 第1巻』, 237-439, 三省堂